

CAPNA

キャプナ★ニュースレター



9月1日、岩城理事長らCAPNAの代表団8人が、スコットランドの「チルドレンファースト」を訪ね、虐待防止の思いを込めて、連帯の固い握手を交わしました。

英国の虐待防止の取り組みは1世紀以上に及び、多くの市民団体が、社会の中で重要な役割を果たしています。3日間の視察で、CAPNAは多くのことを学びました。

本号は日英交流の記念号として、8ページの大特集をしました。

31

血のつながりを超えて

8月28日、名古屋市女性会館にて行われたCAPNA市民講座では、お二人の里親さんをゲストにお迎えし、終始なごやかな雰囲気の中、実際に子どもを育てることの大変さとそれに負けないくらいの素晴らしさをたっぷりとお聞きすることができました。

また、児童福祉司さんや議員さんからは、日本の里親率が欧米に比べて極端に低いことや、特別養子縁組制度などの法的な問題などについても、大変わかりやすく説明していただきました。

進行役の矢満田篤二理事からは、子どもが里親を選べる時代を、という言葉があり、それは皆が安心して過ごせる社会の実現を目指すことにもつながると感じています。

10月の市民講座は「知って得する税金」です

今回は、税理士の水野正三郎理事に、主婦と税金、サラリーマンと税金、自分で出来る還付申告など、知らないで過ぎていく身近な税金のお話をうかがえます。10月23日(木)18時30分より、名古屋市女性会館にて。会員の方は参加費無料、一般の方は500円です。

どうぞふるってご参加ください。

お知らせ

子育てフェスタ in あいち 第2回

「つぎを合おう! 人・情報・役割を!

子育て中の人、子育ての応援をしたい人も、それぞれの立場の違いを超えて集い、地域社会に子育て支援の輪を広げましょう。

11月15日(土)10:00~16:30

愛知県女性総合センターウィルあいち 参加費無料

分科会への参加は申し込みが必要です(CAPNA事務局へ)

学校関係者虐待防止講座

~子どもを守るため、今、できること~

11月8日(土)13:30~16:30

アイプラザ岡崎

資料代 1000円(CAPNA会員500円)

参加申し込みが必要です(CAPNA事務局へ)

ご寄付

次の皆様からご寄付をいただきました。お礼申し上げます。

(8-9月分、順不同、敬称略)

【団体】匿名希望 2社

【個人】内河恵一、岩城正光、矢満田篤二、中川信治、山田裕子、他匿名の方2名

CAPNAニュースレター31号 (隔月刊15号)

2003年10月10日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

子どもを守る伝統と技術

CAPNA代表の8人が訪ねたチルドレンファーストは、虐待防止のNPOの大先輩。英国社会の中で力強い活動を展開していました。多くのことを学び、元気をもらった3日間を報告します。

資金集めの知恵は全員で

板倉 賛事

「年間予算は500万ポンド（約1億円）」

財政担当マフィーさんの説明に、一同驚きの声を上げました。

100年以上の歴史を持ち、スコットランド全域に活動を広げている組織。国や自治体などからの公的資金と個人や企業からの民間資金の比率はほぼ半分ずつ、このバランスが大事で、公費が多ければ安定的だが実験的なことがやりにくくなる、とのこと。それだけに民間、特に企業からの資金集めに力を入れています。

資金集めのアイデアは誰が出すのかと尋ねたら「全員」という答えが返ってきました。資料をみるとそれがよく分かります。各地のサポーターがさまざまなイベントなどを通じて資金を集めています。企業にはチルドレンファーストの実績を訴えて協力してもらおう。保険会社からは5万ポンドの寄付と社員ボランティア、玩具会社からはぬいぐるみ、製紙会社から提供された用紙と印刷会社の協力で絵本の製作など。また、会員がシンボルマークのピンバッジを胸につけてキャンペーンすると町の人が募金してくれます。

イベントも豊富。ハーフマラソンやサイクリング普及と団体の協力による80キロの自転車ロードレース、食事・ダンスパーティー、コンサートやクリスマス

マスやハロウィーンのバザーなどなど。面白いのは「脱獄コンテスト」。定められた6箇所の監獄から3人一組で脱出し、15時間以内にできるだけ遠い目的地を目指します。ただし、移動にお金を使ったり、法律を破ったりしてはいけません。

財政の80%は人件費とのことで、電話相談や各種の援助プロジェクト実行のためには、マンパワーが命のチルドレンファーストにとって資金集めはとても重要な位置づけがされていました。宗教の違いなのか、お金集めにマイナスのイメージは感じられず、日本のNPOももっと資金集めにどん欲になるべきなのかな？と感じました。

YOU CAN DO IT !

瀧本 星子

飛行機の遅れや時差で疲れ気味の私たちを、本部のスタッフの方々は温かく迎えて下さいました。

電話相談室や事務室の説明を受けた後、私は電話相談スタッフの方とお話をする事が出来ました。「あなたはこの団体の中で何をしているの？」と質問されたので、週に一度のボランティアで事務的な仕事のお手伝いや、電話相談のデータをパソコンに入力していると答えました。「ホットラインの電話は出ないの？」と聞かれたので、いつも私が電話相談について思う事をお話しました。



歴史の重みを感じさせるエジンバラの街

気がつくと、青なのに車が止まっていた。二人が渡り終えるのをじっと待っていた。

私はそっと周囲を見回したが、誰もが当然という顔をして見守っていた。二人が雑踏のなかに消えると、またせわしく車が行き交い始めた。

* * *

イギリス人の「弱い人」に対する視線はさりげなく、温かかった。これは、訪英中、常に私が感じていた印象である。

エジンバラの街で

加藤 悦子

エジンバラの夕暮れ。黄金色の光が建物の壁に反射し、影が長く尾をひいている。

私は旅人の気楽さを存分に味わいながら、初めての街を歩いていた。通りには何が楽しいのか、笑い転げ、はしゃぐ若者のグループがいた。その横を大人たちが荷物を抱え、足早に通り返っていった。

* * *

市内では、信号を守らない人が多かった。車の流れがとぎれると、信号が赤でも人々は当然のように渡り始めるのだ。周囲につられ、私も急いで横断歩道を横切ろうとした。するとふと、後ろにいる一組の老夫婦に目がとまった。

クラシックな服を着こなした小柄な二人は一枚の絵のようで、そだけポッカー時がとまったような感じであった。70は超えているだろう、杖をつきゆっくり進む夫。薄いグリーン色の背広に帽子をかぶり、シャンと背筋を伸ばした姿は「これぞ、英国紳士」である。傍らには上品なワンピースを着こなした妻が寄り添い、おぼつかない足取りで歩いていた。



高齢者たちが覗くオールドバー

CHILDREN 1ST(チルドレンファースト)の歩み

19世紀のアメリカで、養父による児童虐待の事件が起こり、当時8歳の女の子メリー・エレンを保護するために有効な法律がなかったことから、1875年、ニューヨークで「子どもの虐待防止協会」が設立された。1884年にはロンドンにも組織ができ、1889年にはグラスゴーとエジンバラの支部が統合されて「スコットランド子どもの虐待防止協会」となった。1925年には「王立RSSPCC (Royal Scottish Society for Prevention of Cruelty to Children)」となり、1995年に現在のチルドレンファーストに改名された。組織の活動は、ストレスを抱える家族のサポート、危害やネグレクトから子どもを守ること、虐待を受けた子どもの回復を手助けすること、子どもの権利と利益を促進することを柱にしている。

スコットランドでは、スタッフとボランティアがスキルを駆使して、子どもが困難を乗り越え、人への信頼や自信を取り戻せるよう手助けしており、現在、17の地方行政区で30のプロジェクトやイベントを、3つのスコットランド全域対象のサービスと共に提供している。今回の訪問は、スコットランド全域を対象としたペアレンツラインと、スポーツ界での虐待防止、グラスゴー支部では性虐待の被害者を対象とした「チルドレンアンドファミリーズ カウンセリング プロジェクト」、東ロジアン支部では、若い親たちへの在宅援助「ヤングファミリーズ アウトリーチ」について勉強したが、活動全体からみればごく一部である。(山本亜紀)



CAPNA訪英団

岩城正光 (理事長)、白石淑江 (副理事長)、上野美子 (常務理事)、加藤悦子 (常務理事)、小久保裕美 (理事)、山本亜紀 (事務局スタッフ)、瀧本星子 (事務局スタッフ)、板倉賛事 (会員)

8月31日 出国

9月 1日 チルドレンファースト本部 (エジンバラ)

2日 グラスゴー支部

3日 イーストロジアン支部

以降、ロンドン、湖水地方の観光を経て帰国。

若い親へのアウトリーチプログラム

小久保 裕美

3日目の研修場所イーストロジアンは、エジンバラからタクシーで40分くらいの道のり。イーストロジアンの建物はこじんまりとした木造平屋の建物で、タクシーが迷ったくらいの奥まったところにあった。表側は小学校と保育園があり、そこへ隣接していた。見学時間が午前10時半すぎだったこともあり、学校の中庭で子どもたちが遊んでいた。どこの機関もそうだったが、スタッフ（写真下）の人たちがドアの外まで出迎えてくださる。そして心温まるお茶とコーヒーとお菓子が用意されている。ここでは4人のスタッフの話聞いた。ここのスタッフは女性ばかりで、ソーシャルワーカー、教師、保健師など多職種である。この日は日差しがまぶしく、皆の熱気で部屋が熱いくらいだった。レトロな大きい音のする扇風機が登場した。このような気候はめずらしいと伺う。私たちの行いがいいのかなと思う？スタッフの話の要約は以下のようであった。



ここは、子どもの発達と福祉が目的の機関である。プログラムは開始されてから2年であり、5歳以下の子どもとその家族をサポートしている。裁判所によって要保護とされた子どもが行政の子ども福祉担当部に登録されていて、登録された子どもを行政が紹介してくるというシステムになっている。まず、はじめに親子の面接をする。親に直接聞くこともあるが、一定期間子どもだけに話しを聞くことがある。若い母親のグループをエジンバラのコミュニティセンターで行なっている。2名から3名のスタッフが関わる。参加者は4、5人。多くても8名までと考えている。家庭訪問している保健師から紹介をうけている。母

親の年齢は、17歳から21歳くらいまで中には13歳の人もある。グループでは、遊びから栄養指導まで行なっている。もう少し、グループの人数が欲しいという感想があった。わたしはこころのなかで、そうねえと共感する。

3つの事例をもとに話が具体的に進められた。夫と別居して4人の娘をもっている母親に対する家庭訪問援助の事例、薬物とアルコール依存を持っている母親と未熟児で生まれ栄養失調になった子どものいる家庭への援助、多問題家族の影響から暴力的になった子どもと母親の援助などである。

印象に残っているのは、親子関係を人形を使ったロールプレイで再演し、それをもとに親子の関係性を考えるという人形ロールプレイである。まず、援助者と子どもが人形を使って母親（援助者）と子ども（子ども）の役になってロールプレイをする。それを見て、母親が子どもに対するかわり方を学ぶというものだったり、反対に子どもが母親を演じて、母親が子どもの演ずる母親像をみて、自分の関わりを振り返るというものである。人形は70～80センチくらいある布製でやわらかい感じがした。この方法はとても具体的で説得力のある方法だと思った。子どもが虐待を理解するための絵本も紹介していただいた。こちらも細かな配慮の感じられる本であった。



ここへ来た子どもたちが利用するブレイルーム（写真上）は、中から鍵が自動的にかかるものであった。アメリカと同じように子どもへの銃の乱射事件があって、以後施錠が義務付けられたという。池田小学校事件と、それが契機で成立した「保護観察法」がふと胸をよぎり、複雑な思いかられた。

CAPNAの電話相談にはとても興味があつてできれば相談員養成講座を受講したいのですが、身近に小さな子どもがいるわけでもなく、子育ての経験もない。相談記録の用紙をパソコンに入力する時に読ませていただくだけで心が重くなってしまうことがあるのに、実際に電話に出たら自分はどうなるのか、電話をかけてくる方の気持ちを受け止めたり、気持ちに添うことができるのかがとても不安で自信がなくて講座を受講する勇気がないのです。

こう言った後で「あなたは相談員になると決めた時、私のような不安を感じませんでしたか？」と尋ねると、さっぱりと「感じなかった」という答えでした。「でも・・・」と続いて「でも、相手を理解できるかどうかが一番心配だったけれど、ちゃんとトレーニングを受けるのだし、今までで理解できなかった電話はそんなになかった」と言うことでした。「まったくなかった」と言われたら、更に自信がなくなったかもしれませんが、「そんなになかった」と言う答えに少しほっとしました。もしかしら、私は「完璧」を求めていたかもしれませんが、でも、完璧でなくてもいいということに彼女は気付かせてくれました。「じゃあ、次に養成講座があったら受講してみようかな」と言う私の年齢を尋ねられ「まだまだ若いだから、挑戦すればできるわよ。あなたならできると思うわ」と言って励まして下さったのです。

その後しばらく隣同士に座り、スタッフのお話を伺い、彼女は話の途中で座を離れる事になりました。その時にも「あなたはできる。やらなくちゃ。がんばって」と声をかけてくださいました。この一言はとても嬉しかったです。彼女に会えただけでも、この旅行に参加したかいがありました。

彼女の笑顔と共に思い出します。YOU CAN DO IT!

ペアレンツライン

上野 美子

チルドレンファーストの本部を案内していただいた。事務所の内部の広い部分が、電話相談「ペアレンツライン」の部屋に当てられていた。

電話室は10畳くらい。事務室との境の壁はガラス張りなので電話室の様子が外から見える。ただし、防音になっているので、内部の音は外には全く聞こえない。室内には、電話スタッフの机が5つバーテーションなしに並び、5人のボランティアスタッフがヘッドホーンをつけて5本の電話を受けていた。その他に、やはりヘッドホーンをつけたスーパーバイザーが在室していて、ボランテ

ィアスタッフが援助を求めるとメモで相談にのっていた。現在、スーパーバイザーのフルタイムスタッフ2名と、パートタイムスタッフ4名、48名のボランティアスタッフが活動している。もちろん、電話相談では聴くということに徹しているというお話だった。

「ペアレンツライン」の開設時間は週5日で9時から17時。無料・匿名で誰でもかけることができる。昨年度は10,872本の相談が寄せられ、39%にあたる4,292件に対応できたということだ。

相談者内訳は母親60%、父親13%、祖母5%などで、CAPNAボランティアの相談者に比べ父親からの相談が13%と多い。また、行儀・しつけに関するものが26%、別居・離婚12%、虐待10%、暴力7%、教育4%など、相談内容が多岐にわたっており、子どもに関する多くの悩みの相談に乗っている。子どもを育てることの難しさや、親の悩みの相談に応じられる多くの社会資源を確保していることが、推察された。家族や子どもの問題は一つの組織では解決できないことから、このように総合的に子どもの問題や親の悩みに応じることができるのが、ペアレンツラインの特徴である。

良きお手本として

山本 亜紀

今回の視察で感じた事は、いかにチルドレンファーストが幅広く、しかも奥深いところまで国と人々の中に浸透しているか、また人々の理解や認知度の高さに驚かされた。子どもたちにより良い環境を提供していきたいという強い志に、たくさんの方が関わり合いながら歩み続けています。「子どもたちをまず第一に考える」という名前にふさわしい活動内容です。虐待のみではなく、広い視点から子どもたちを、または子どもたちを取り巻く大人をもサポートしています。CAPNAがここまで来るにはそれなりの年月がかかりそうですが、良きお手本として、かつ目標の一つとして目指していければと思います。まだまだCAPNAの活動を知っている人は多くなく、また、虐待を含む児童福祉に対する日本での世間の理解と協力もいまひとつ足りないところ。これからのCAPNAに何ができるのか、課題は多いですね。ここで得た知識を少しでも活用できると良いなあと思っています。

チルドレンファーストの各支部ではみなさん暖かいもてなしをして下さり、とても寛容に対応して頂きました。スタッフのみなさん、とても素晴らしい結束力で暖かい関係が築かれており、そこから優しいけれどたくましい力が、それぞれの支部での原動力となっている気がします。

イギリスで知った「子どもの人権」

岩城 正光

グラスゴー支部を訪れたとき、性的虐待を受けた子どもを支援する活動はCAPNAやCAPNA弁護団がやってきた活動と同じだと感じた。今までかかわってきた支援や裁判への援助は間違っていないかと思っただけだ。

でも、すぐにそれは大きな誤解であることを知らされた。ある相談室の床に作られている法廷の模型を目にしたときだった。そこには、裁判官、書記官、陪審員、廷吏、弁護士、検察官、被告人、虐待を受けた子ども、すべての人形が一つ一つ丁寧に作られており、法廷室内も実際のままのミニチュアができていた。

被害を受けた子どもが法廷で被害状況を証言するとき、どこに座ってどのように扱われるかが一目で見てすぐにわかるような配慮があった。しかもこの模型を使って子どもに裁判風景を説明し、緊張をほぐし、安心して証言することができるように支援しているのは、検察官や弁護士なんかじゃなくてこの相談スタッフ。この施設は弁護士会でもなければ、スタッフにも弁護士はいない。法的なサービスもスタッフがやっているんだ！

声も出ないようなショックを受けた。僕の脳裏には、日本での法廷シーンが甦ってきた。性的虐待（準強姦）で起訴された父親の刑事裁判で証言させられている被害者の姿。そうだ、あのとき被害を受けた子どもは、日本でようやく認められるようになったばかりの、別室でのビデオリンクによる証言だった。だが、尋問の途中で彼女は解離症状を見せ始め、証言は的を絞れなくてどんどん迷走していき、迷走していく証言から裁判官はどのように心証をとるのだろうか。あいまいな記憶ばかりでこの子の記憶はいい加減じゃないかと不利にならないだろうか。傍聴席にいる僕の心はどきどきだった。こんな証言をさせること自体が虐待（二次被害）じゃないのか。性的虐待を受けた子どもの心理を裁判所は分かっているのか。いや、この検察官や弁護士は、この尋問で心の傷をさらにえぐっているだけじゃないのか。

あのときの僕の悔しさがこの相談室で甦った。そうなんだ。市民が法廷模型を作っただけで徹底して子どもの立場になって支援していくことが大切なんだ。司法だからといって、専門家である法律家に任せているだけじゃダメなんだ。子どもを根柢から支援し続けられるのは、結局専門家ではなく市民なんじゃないのか。市民活動の尊さを訴え続けていた祖父江文宏の顔が浮かぶ。祖父江さんは「行政では虐待は救えない」と言っていた。でも、それは「行政だけでなく、専門家でも虐待は救えない」とも言えないか。

こんな感慨を抱きながら別の相談室に向かう。そこには「あなたの人権を知って」というパンフレットが置いてあった。イラストを使ってどの条文があなたの権利を保障しているのかをわかりやすく解説している。

こんな楽しい子ども向けの人権パンフレットこそ子どもたちのために弁護士会が作るべきだよな、「法教育」もこの視点から捉えるべきじゃないのか、なんて勝手な感慨を抱きながら、エジンバラ行きの列車に乗り込んだ。



入り口のぬいぐるみたち

ました。

しかも、各部屋それぞれに個性がありました。例えば、10数年のベテランスタッフの部屋には、スピルバーグの映画「ET」の人形やモンスターなど。また、笑い顔から怒った顔に変身するクマのぬいぐるみや、頭の中に「泣いている僕」「怒っている僕」「怖がっている僕」の3人が入っている人形もありました。

人形の頭の中から色々な表情をした小さな僕を取り出しながら、子どもと対話するのだそうです。そして、感心したのは、その人形のハートには「ハッピーな笑顔の僕」が入っていたことです。また、箱庭が備えられている部屋もありました。「この間、こんな子どもがいたのよ」と見せてくれたのは、男性の人形が頭を地面に突っ込んだ状態で逆立ちしており、母親と手をつないだ女の子と、男性、女性の4人が横一列に並んで、それを眺めている箱庭でした。その過酷なシーンからは、子どもたちの心を苦しめている激しい感情が想像されました。と同時に、この部屋は、子どもたちが自分で処理しきれない様々な感情を、安心して表現できる場であるということも理解できました。

これら5つの相談室の他に、もう1つ広めの相談室がありました。その部屋は、子どもと家族とが一緒に話をする時に使っているのだそうです。子どもが、家族に性的虐待を受けたことを話すことはとても辛いことです。家族とのコミュニケーションを通じて、そのことを理解してもらったり、「きょうだいから特別視されていないか」「自分の側に原因があったのではないか」という不安を取り除く努力をしているということでした。この部屋の全体照明を落とし、暖かな部分照明を施して、ゆったりしたソファを置いているのは、温もりのある落ち着いた雰囲気を出したためなのでしょう。



虐待防止を呼び掛けるポスター

しかし、来ることは家族の自発的な意志だと言います。昨年度は、前年度からの継続13件、新規29件の合計42件を扱い、うち39件は年度内に終了したそうです。

このような相談活動は、日本ではどちらかというと心理治療もしくは心理相談と考えられているような気がしましたので、違いについて質問しました。スタッフはこう答えました。

「私たちの仕事は、あくまでも子どものニーズを理解することです。そのためには、子どものプレイを理解することが大事です。子どもにとってプレイは、言語表現を補う豊かで重要な表現手段だからです。けれども、ここはトラウマ治療を扱う専門店ではなく、日常生活に必要なものを用意しているコンビニエンス・ストアのようなところです。性的虐待を受けた子どもの治療が目的ではなく、安定した生活を過ごせるようにサポートするところです。子どもに身体的、精神的な症状が認められる場合には、治療機関につなげています。子どもが治療を必要としているかどうか、そのニーズを理解することも、私たちの仕事の一つです」

性虐待を受けた子どもと家族への対応

白石 淑江

エジンバラから列車で1時間ほどのグラスゴー支部では、性的虐待を受けた子どもとその家族に対して、治療的な支援活動を行っています。外観は古い建物でしたが、一歩中に入ると、窓際に並んだ大小のぬいぐるみたちがにこやかに私たちを迎えてくれました。不安と緊張に顔をこわばらせながら訪れる子どもたちの心を、こうして和ませているのでしょう。

奥に進むと、1階と地下に相談室が計5部屋。5人の専任スタッフがそれぞれ自分の相談室を持っています。そして、どの部屋にも子どもたちが目を輝かせそうな玩具、ぬいぐるみや人形、絵本、ゲーム、箱庭、絵の具や粘土などが所狭しと並べられてい



表情を変えるクマの人形

この専任スタッフは全部で6人。全員女性です。5人が相談室業務に携わっており、もう一人は、スポーツクラブなどで発生しやすい性的虐待問題の啓蒙活動を担当していました。6人のバックグラウンドは、5人がソーシャル・ワーク、1人がソーシャル・エデュケーションです。どの人も自分たちの仕事に誇りと自信をもっており、笑顔が素敵な親しみやすい方でした。しかし、話の内容はシビアであり、それをおしゃべりで笑い飛ばしたりしながら、支え合っていることなども話してくれました。ここにやって来る子どもや家族の多くは、福祉サービスやメンタル・ヘルス・サービス（行政機関）からの紹介が80%以上。